

DMOを中心に宿泊施設や利用者を巻き込んだ先進的なワーケーション施策を展開。集う人たちの交流がもたらす新たな未来に期待

コロナ禍においてワーク(仕事)とバケーション(休暇)を融合させたワーケーションという概念がますます脚光を浴びるようになった。日本各地のDMOがワーケーションによる集客を期待し、さまざまなアプローチを試みる中、八幡平DMOは早くからワーケーションに注力。すでに数多くの実績を残す先駆けともいえる存在だ。本項では㈱八幡平DMO取締役CMO 柴田亮氏や日本ホテルアプレイザルの北村氏、そしてペンション安比ロッキーインのオーナーである大滝克美氏、八幡平ワーケーションウィークイベントコーディネーター 岩村和哉氏を交えワーケーションの持つポテンシャルや今後の可能性について聞いた。

企画・構成 本誌：林田研二 文 高澤豊希 /取材協力(株)八幡平DMO/ペンション安比ロッキーイン



㈱八幡平 DMO
取締役CMO 柴田亮氏



ペンション安比ロッキーイン
オーナー 大滝克美氏



㈱日本ホテルアプレイザル
代表取締役 日・米・英 不動産鑑定士
北村剛史氏

ワーケーション部会を立ち上げ積極的な誘致活動を展開

林田 全国の地方創生に関するコンテンツを見渡す中、八幡平DMOのワーケーション施策に大変興味を引かれたのですが、具体的にどのような活動をされているのですか。

柴田 八幡平DMOでは、インバウンドの誘致に加えて平日の稼働や長期滞在の

実現の手段として、MICEや企業などさまざまな誘致策を考える中で、3~4年前からワーケーションにも注目していました。八幡平では元々フリーランスの方とご縁があり、ロッキーインさんなど先行してワーケーションを実践頂いておりました。2019年にワーケーション自治体協議会の発足時に加盟すると共に、2020年には環境省の補助事業でモニターツアーなども実施しましたが、企業向けの展開に

は苦勞しています。モニターツアーも実施しましたが制度的にも確立している企業が少なく、なかなか次につながらないという現状です。企業は単にワーケーションだけだと来づらいので、企業研修を結びつけて展開していこうと考えています。八幡平の地熱や松尾鉱山などから循環経済を学ぶなど、これからのサステナブルなコミュニティーのあり方を学ぶ企業研修プログラムを日本能率協会様と開発中です。

今年度はワーケーションのHPもつくりました。その結果企業からの問い合わせも増えてきています。また、フリーランスの方によるワーケーションの展開は企業向けと比べて対照的で、自立的に発展している状況です。

八幡平は、もともと自治体がスパルタキャンプという無料でありながらプロフェッショナルなプログラミング教室を開いていて、ホリエモンが紹介してくれるなどしてフリーランスのプログラマーにはちょっとした知られる存在でした。スパルタキャンプのおかげで何かおもしろいことをしている地域だなと一部に認識されていたことは大きかったと思います。

林田 大滝さんはどのような経緯から八幡平 DMO のワーケーション施策に関わられたのでしょうか

大滝 私はリクルートの不動産開発部署を経て、リクルートが開発した安比高原スキー場の職員として八幡平にやって来ました。岩手県を中心に東北でコンサルティングをしていたときに、安比ロッキーマウンテンの案件も引き受けました。コンサルティングしているうちに、この施設の魅力に取り憑かれ、みずから経営することになりました。平日はコンサル、週末と繁忙期は宿泊事業という具合です。安比ロッキーマウンテンはリゾート客だけでは食べていけなかったため、企業研修の集客も考え始めました。ロッキーマウンテンそのものが目的地になるようここで私がコンサルを行ない、泊まってもらうという方策です

また、施設を旅のサブスク（定額制宿泊サービス）の HafH にも登録し、“旅する料理人” 林直子さんが来てくれたり、岩村さんが来てくれたり、こうしたコミュニティが面白いと感じました。じゃらんや楽天ではリーチしないような人たちが年齢

的にも 20 歳以上離れています。彼らが来てくれたのをきっかけに、八幡平 DMO が 2020 年にワーケーション部会を立ち上げられたときに事務局に入りました。事務局では今後の八幡平ワーケーションに取り組む組織づくりやモニターツアーも実施し、ワーケーションウイークも 5 回ほど開催しています。

林田 岩村さんについても教えてください

岩村 私の経歴は会社員生活を経て、ゲストハウスの経営をしたくて仙台のホステルキコノスタートメンバーとして参画しました。その施設が 2019 年に HafH の登録施設になり、そのつながりでロッキーマウンテンと知り合い、2020 年秋のモニターにも参加しました。その後コロナ禍となり、ゲストハウスが厳しい状況になったため退職し、副業だった動画制作の仕事をメインにするようになりました。

以前から出身地である東北のために何かしたいという思いがあり、コミュニティ作りにも興味があったので、大滝さんから声をかけていただいたときに短期的なイベントの企画というかたちで、ワーケーションマネージャーをお引き受けしたのです。

さまざまな課題を認識しつつも ワーケーションの市場に期待

林田 ワーケーションはコロナ禍で注目を浴びましたが、もともと需要があったのでしょうか。また、ワーケーションマーケットはアフターコロナでも拡大していくとお考えですか

柴田 コロナ前から旅するように働くというライフスタイルの方は存在しました。これは日本だけの現象ではなく、海外では

デジタルノマドと言われる層がコロナ禍を通じて企業内にも増え、日本と同様にワーケーションのようなスタイルは注目を浴びています。ワーケーションができる環境というのは今の Wi-Fi のように宿の要件の一つになり、ワーケーション自体は目的ではないものの、Wi-Fi のように宿を選ぶ際の条件のひとつになって行くのかもしれませんが。だからいまのうちにワークスペースを設けるなど、働きやすい宿の環境を整備していくことが必要だと思います。

もう一方でワーケーションは交流という価値もあり、この部分は旅の目的になるかもしれません。

大滝 旅先でメールをチェックしたり、投資先の株価を見たり、電話やファックスすることはいまでもありました。もともとそれらをしやすいところを探していたと思いますが、極端に打ち出しすぎると違和感、居心地が悪く感じる人がいるのかも知れません。そもそも日本人は長期旅行が少なく、ワーケーションにも重い腰が上がらないのでは。欧米的なライフスタイルの変化にまだ日本が至ってなく、大手企業がデータの社外持ち出しを禁止しているなどワーケーションの推進に組織的な規制がかかっていることも聞かえてきます。

また、構造的な部分でも中小規模の宿泊施設は小人数、低単価の長期滞在に向いていません。10 時～15 時は休み時間や買い出しなどに当てており、できれば宿泊者には外出してほしいのです。昼食を提供できない、朝食も 1 回 1000 円でも 10 日いる人は 1 万円かかるので食べてもらえないなどの課題もあります。カップラーメンのお湯を要求されて提供すると、ニオイがロビーに広がり、リゾート施設のレストランのプレステージにそぐわないということも起こります。古い情緒のある温泉旅館では PC のタイピングの音が響き渡る

と、くつろぎにきた人たちが不満に思うかもしれません。このようにどこかでハウスルールをつくる必要もあるかと考えています。

しかし、ワーケーション市場は確実に増えていくと思っています。その理由の一つとして20代、30代のライフスタイルを知れば知るほど、われわれバブル世代の感覚とは違うことを感じているからです。価値基準や行動基準がある中で奔放にコミュニケーションを楽しみ、生業もうまく行ない、誰

も思っています。私はコロナ前から5泊、6日で長野県に行きゲストハウスに滞在しながら仕事するような働き方を行ってきました。当時はそれを表現する言葉はなく、コロナ禍でみんながワーケーションという言葉を使うようになり、認知されてきたと感じています。今回、ワーケーションを企画していく中で企業の方にも参画していただいているのですが、結局はパッケージングとして来ている方が多く、自分の活動の仕事を持ってきていて会社の仕事は持ってきづ

林田 ワケーションも広く言えば、サステナビリティという地域における持続的発展のソリューションだと言えます。日本において欧米と比べサステナビリティへの意識も運営も遅れていると思いますがいかがですか。

北村 2030年のSDG's目標に向けて自然環境配慮型の観光地運営及び宿泊施設運営が強く求められています。国内では、弊社が2014年に同調査を行ってお

り、当時から強い関心が寄せられている大きなテーマであったといえます。代表的な環境配慮型運営として直接的取組として「温室効果ガスの抑制」と間接的取組として「環境保全基金への寄付」を想定し、それぞれに対する顧客ニーズ（重視するか否か）と経済的効果（実施する施設に追加で金銭を支払うとすればいくら支払うか）を、全国ランダムに選ばれた男女200名に調査を実施しました。その結果、環境配慮型運営に関し、特にリゾートホテルや旅館でのニーズ

が強く見込まれました。環境配慮型運営は、上記のような効果だけではなく、その行為がさまざまな連想を引き起こす可能性が示唆されました。“Sustainability”と海外の概念が広まってきたというよりもむしろ、国内では日本ならではの、「サステナビリティ」の追求が既に強く求められていると考えることができます。

林田 ところで八幡平エリアでワーケーションをする強みや特徴はどこにありますか



ペンション安比ロッキーイン外観

かが総取りするわけでもなくシェアする。そうしたことをワーケーションウイークの期間に感じました。個人的にできるのは仕事を持って移動でき、長期滞在したいと思っている人を探すこと。短い滞在でもそうした人が地域に与える経済的インパクトは大きく、テーマによるメッカをつくっていきたいと思っています。

岩村 私自身が利用者側の感覚でいうとワーケーションはおそらく伸びる市場だと

らいようでした。だから当初は福利厚生などで利用できるとよいかもしれません。

一方、フリーランスの立場からすると、ワーケーションで企業の方と話す機会が得られ、地元やフリーランス同士とも違う人とのつながりができ、そこから仕事につながることも期待できるのがよいと感じました。

地方創生には地域の持続性や継続性が大事

柴田 アクティビティで言うと夏は登山やマウンテンバイクなど、冬はスキーなどオールシーズン楽しめること。八幡平ワーケーション部会の輪が広がる中で、ワーケーションの受け入れをしようという宿泊施設も拡大しています。大滝さんのペンションロッキーインに始まり、松川温泉峽雲荘、新安比温泉静流閣など温泉宿や市内の主要なホテルでも受け入れ可能です。

大滝 観光地は、“日本一”や“ここだけ”というドグマにとらわれないことが重要だと思います。こう言ってしまうと身も蓋もないように聞こえてしまうかもしれませんが、勝てないものは勝てないのですから。淡々と自身の生活や仕事ぶりを発信することで魅力とどこでつくっていったと考えています。あえて言葉で表すと哲学的な場所ということ。ペンションを運営しながらここで暮らすためには膨大な作業が必要となります。夏は庭の芝生を刈り、冬に向けて大量の薪を割ります。冬は駐車場の雪かきに追われます。でもこれが楽しいという若者もたくさんいるのです。八幡平に来て人生観が変わるようなこと、自然散策ガイドの一言から感銘を受ける人がいたり、薪を割ったりくべたりしている中で何かを感じたり、そんなことが起きるといいなと思っています。

今後は、リクルート出身で実績を残した人に関わるコンテンツも考えています。まずはリクルート系の書籍が読める場所を設けたり、著者を呼んで焚き火を囲み、皆で話すなど。そんな場所にしていきたいですね。

岩村 私は気分転換や新しいアイデアを出したいときにいつもとは違う環境に身を置きたいという欲求があります。山形や十和田、福島などにもワーケーションで行

くのですが、八幡平はすべてにおいて丁度よい場所だと感じています。八幡平は圧倒的な自然が創造性をかきたたせてくれます。そして温泉、サウナ、おいしい食事などがあり、それらが丁度よいのです。

最近はある程度、ワーケーションにかかわる取り組みを継続的に行なってきたことで、最初ふわっとしていたことがクリアに見えてきました。サイトも立ち上がって情報も整理できました。スパルタキャンプのような人材的な取り組みやおもしろコミュニティもロッキーインを中心につな

ステナビリティや地方創生のためにできることもたくさんあると思います。また、観光を通じてシビックプライドを醸成していくことにも目を向けて、いままでの一泊二日の慌ただしい旅行スタイルではなかなか難しいです。ゆったりと余裕をもった観光スタイルに変えていかないと、観光が持つ付加価値を日本人が手にすることができないように感じます。ワーケーションはまさにその架け橋になる一つの手段です。仕事をできる環境を整えることによってゆったり長期滞在を可能にし、そ



八幡平ワーケーションウィークイベントコーディネーター 岩村和哉氏

がってきています。牡蠣の生産者や料理をする方が集まる場所になっていて、そういうことが渦を巻いています。東北の文化的な要素が集まってくる地域に八幡平がなりつつあることも面白いと思いますね。

林田 ワケーションを通じて八幡平DMOが目指しているところとはどのような姿ですか

柴田 DMOとしては八幡平の観光を振興することがミッションです。地域のサ

の中で参加者同士、地域の人との交流が生まれて仕事面でのつながりが生じたり。そうしてリピーターが増え、ゆくゆくは移住につながるワーケーションは、一回あたりの単価は低いかもしれませんが、ライフタイムバリューで考えたときに高いものになりうる可能性が秘められているのです。ワーケーションをシビックプライドや人口増加へ結びつけ、地域を強くしていくことにつなげていければと願っています。